



岡本キャンパスには、世界とつながる空間があります。そこを起点に広がる留学生と甲南大生の交流や、国際交流センターのユニークで多様な取り組みを紹介します。

19

世界の友だちがすぐそこに!
”国際交流”が
広がる甲南キャンパス

Konan International Exchange Center



とことん調べ隊 民俗研究会

インターネットを用い机上でいろいろな情報が得られる時代に、徹底した「現場主義」にこだわり、人間の生活や文化をひととく民俗研究会の活動に焦点を当てます。

17

味噌って何だ?
民俗研究会が
お答えしましよう!



<特集>
後ろを振り返りながら、

前進する智慧。

昨年、奈良東大寺の最高責任者にあたる別当に、本学卒業生 筒井寛昭氏が就任されました。今回は筒井別当に大震災などの苦難を共有するための心のもじょうについて、仏教の視座からお話しいただきました。

07

華嚴宗管長 東大寺第221世別当
筒井 寛昭 大僧正

今、甲南ができる
伝える。つなぐ。
そして続ける。



03

<特集>
甲南大学の被災地支援
震災から3年、被災地に対してそれぞれのタイミングで行動した3人の学生を紹介します。

◎「生と死」を考える講義

死生学

を学びませんか?

学生の支持を得る人気の講義
「死生学」について、上村名誉教授
が講義の様子やねらいを語ります。

05

文学部社会学科
社会調査工房



論文から映像作品まで多様化するメディアに対応し、施設が進化しました。

メディアを駆使して
現代に切り込め!

24

学生団体 Agrista
マネジメント創造学部生の挑戦

にしのみや学生ビジネス
アイデアコンテスト
最優秀賞受賞。

農業の前途多難な状況に立ち上がったマネジメント創造学部の学生たち。独自の視点で5人が挑戦する「カッコいい」農業を紹介します。



21

日本の未来を
変えたい。

「カッコいい」農業で

高 中 TOPICS



理系男子
リケダン!?
大いに奮闘!

現地調査を実施し本格的な研究に取り組む理系男子たち。甲南高校で育まれる研究マインドをレポート。

25

在学生の手紙

故郷のお母さんへ
「元気です」の便りをしたためました。



普段は言えない感謝の気持ちを
照れながらも語ってくれました。

♪ リトト リトト

27

◎平生日記
松方コレクション
— 平生釣三郎日記から —

巨万の富をヨーロッパ美術品の収集につぎ込んだ川崎造船所社長 松方幸次郎のコレクションに言及します。



ONLY ONE 裏表紙



爽やかな笑顔に秘めた、持ち前の負けず嫌いな性格で自動車部を牽引する学生を紹介します。

26

なるほど!
甲南

アカデミア



リーダーの
あり方を
考えてみよう

経営学部 経営学科
尾形 真実哉 準教授

優れたリーダーは、社会や組織がより良くなるために欠かせない存在です。「リーダーシップとは」「リーダーは育成できるのか」など、尾形真実哉准教授が専門的な見地から解説いたします。

15

第一線で活躍する卒業生たち
It's KONAN Style
Special Edition



自由闊達な甲南で
文学と人生の素地を
形成しました。

なかい ひさお
甲南大学 名誉博士 中井 久夫氏

日本を代表する精神科医であり、評論・翻訳家としてもご活躍の甲南大学元教授の中井久夫氏。この度のご顕彰を記念して、甲南で過ごされた思い出をはじめ文学者としての横顔など、「知の巨人」にさまざまなお話を伺いました。

11

平成25年度
文化功労者ご顕彰
おめでとうございます。



29

KONAN FORUM

旧交を温める同窓会のお知らせほか、体育会の輝かしい戦績や、教員と卒業生による新刊レビューなど盛りだくさん。また、近日刊行される『甲南学園 by AERA』の情報も紹介しています。

IV

忘れないために、絆を深めるために。

伝える。つながる。そして続ける。



東北地方に甚大な被害を与えた東日本大震災から、3年の月日が過ぎました。被災地のみんなの懸命な努力によって少しずつ復興が進む半面、いまだに多くの人々が仮設住宅での生活を余儀なくされるなど、さまざまな課題も残されています。阪神・淡路大震災を経験した私たちだからこそ、地道な支援を続けよう。その思いは、学生たちの活動にも息づいています。支援のために、それぞれのタイミングで行動した3名の学生に話を伺いました。

東日本大震災の発生直後、居ても立つてもいられず単身、被災地に向かった学生がいます。

「自分の活動を誰かに知つてもらいたいとは思わない」との「ご本人の希望」により、匿名で語つてもらいました。

地図の映像を見た瞬間、被災地行きを決めた。

あの日、僕は、いつものようにスーパーで地震を知ったのは、家電売り場のテレビ画面が一斉に変わったときです。衝撃的な映像を目にした瞬間、「被災地に行こう」と決めました。実際に出発したのは、20日後の4月1日です。発生直後に駆けつけても邪魔になるだけだと思つたし、アルバイトのシフトも決まっていたからです。4月1日の早朝、宮城県石巻市をめざして出発しました。石巻市を選んだことは深い意味はありません。道路事情がわからなかつたので、行けるところまで行こうと考えました。東名高速から東北道に入り、現地に着いたのは翌朝の6時ごろ。

邪魔にならない場所を探して車を止め、通りがかつた人に「手伝えることがあれば教えてください」と頼むと、「道路に散らばつたガレキやゴミを片づける作業を手伝つたらどうか」と現場まで連れて行ってくださいました。

「どうして、来た！」

「厳しい叱責に迎えられる。

現場に着くと、いきなり叱られました。「関西から車で来た」と言つたら、「どうして危ないところに来たんだ。余震が起きたら、どうするつもりだ?」って。言い返すことを多く突つ立つて、「しかたない。せっかく来てくれたんだから、手伝つてもらうよ。ありがとう」と…。作業は、道路をふさいでいるガレキの撤去で、約30人が手作業で片づけるのですが、丸一日やつ

ても10メートル進むかどうか。でも、現地の人にはあきらめないし、落ち込んだ素振りも見せない。テレビでは茫然とした姿ばかり映し出されていたので意外に思いましたが、「これをやらないと次に進めない」ということばを耳にしたとき、道路のガレキを撤去することによって前進しようとする被災者のみなさんのが強い決意を感じました。

そんな人間でありたい。

翌日も朝から夕方まで作業し、3日目の昼過ぎに帰路につきました。当時を振り返つて思うのは、やはり認識が甘かつたということですね。スマートフォンの充電器を忘れたり、足元を守る長靴を忘れたりと持ち物にも不備がありました。

でも反省や失敗も含めて、すべてが当たりました。もし、また国内で大規模な震災が起きたら、間違いなく何らかの行動を起こすでしょう。常に自分ができることを理解できたのは被災地の土を踏んでからでした。

僕の行動は、自分一人で現地に乗り込むという衝動的なものです。やむにやまぬ思いで駆けつけただけに、想定外のことでも数多く経験しましたし、特別な感動秘話もありません。

でも反省や失敗も含めて、すべてが当たりました。もし、また国内で大規模な震災が起きたら、間違いく何らかの行動を起こすでしょう。常に自分ができることを理解できたのは被災地の土を踏んでからでした。

この活動のために真剣に議論し、力を合わせたチームの仲間や、東北で出会った方々、スタッフのみなさんは私の人生の宝物です。

「ボランティア」と聞くと、「照れくさい」「自分にはできない」と感じる人もいるかもしれません。でも動機は何でもいいし、立派じゃなくていいんです。僕も最初は「他大学の友だちをつくりたい」という動機から始めました。活動をしていく中で広がる人々のつながり、笑顔、自分自身の成長もありました。

「誰か」ではなく、一人ひとりが考えていく必要があります。でも動機は何でもいいし、立派じゃないんです。僕も最初は「他大学の友だちをつくりたい」という動機から始めました。活動を通して出会えた人々、経験は今後も決して忘れません。人のつながり、支えてくれる方々への感謝を忘れず、自分にできることを続けていく。そんな社会人になりたいと強く思います。

2011.04

2013.08

2014.03

震災から3度目の夏、2013年8月31日、被災地に向かうバスに乗り込む学生がいました。行き先は、宮城県名取市南西部。「神戸市社会福祉協議会」と「大学コンソーシアムひょうご神戸」が共同で行う復興支援活動「夏休み学生ボランティアバス」に参加した学生たちです。彼らは被災地で何を見て、どんな活動をしたのか。その中のお二人に実際の体験や思いを語つてもらいました。

被災者という「イメージ」から、被災された「あの方たち」へ。

3月11日は、私の誕生日です。2011年、震災が起きた年の誕生日は、大学生活に向けてスタートを切る年でもあり、喜びや期待で胸がいっぱいでした。けれども時を同じくして、東北では夢を抱くことも、ときどきできなくなつた人が、たくさん存在するのだということに気づきました。

誕生日を無事に迎えることも、自分の未来に希望を抱くことも、決して当たり前ではない」。2011年の3月11日は私にこう教えてくれました。そんな中、甲南大学でボランティア募集の告知を見たときは、「この機会に行かなくては!」と思ひ、迷わず申し込みました。

「夏休み学生ボランティアバス」では、宮城県名取市植松入生地区などの仮設住宅で「ふれあい喫茶」のお手伝いと窓・網戸の清掃を行いました。「ふれあい喫茶」では、神戸のスイーツを食べながら住民の方々との交流を深めました。また窓ふきは、藤堂さんをはじめ学生代表が事前に現地でヒアリングをした際「お年寄

被災地支援に携わる教員の声

多くの人が、2011年3月11日に東北で起きたことを映像で目じとしたとき、大変なことが起きていると驚いたことでしょう。それから3年で、この3人の学生のように、実際に被災地へ行き被災した方々と向き合うことを実現させた力は何だったのでしょうか。

震災後、被災地で起きていることを想像でき、力、被災して辛い中で耐えている方々に共感することのできる力、そしてその思いを行動に移す力、またボランティア情報などを収集し行動を実現させる力、これらが合ったものではないかと思います。

私自身、学生ボランティアバスのスタッフ

震災後、被災地で起きていることを想像でき、力、被災して辛い中で耐えている方々に共感することのできる力、そしてその思いを行動に移す力、またボランティア情報などを収集し行動を実現させる力、これらが合ったものではないかと思います。

として、3回宮城県名取市を訪問しました。これからも、学生の思いと行動を甲南大学として支援・応援する体制づくりにかかるつたいたいと思っています。そして、何よりも、ボランティアを通じて紡いだ被災地の方々とのつながりを、これからも継続させたいと

立派じゃなくていい。

昨年3月に「大学コンソーシアムひょうご神戸」による「夏休み学生ボランティアバス」のシンポジウムに参加しました。ボランティア経験のない自分が役に立てるのか不安だったので、尚絅学院大学(宮城県)の学生の「言が背中を押してくれました。

「神戸の学生が、僕たちの地元・東北のこと

を話し合つてくださっているだけでうれしい、元気になる」ということばです。

「夏休み学生ボランティアバス」では、子どもを対象にした縁日を企画。チームの副リーダーとして実施場所を探すなど苦労もしましたが、スタッフ(神戸市社会福祉協議会や甲南大学教職員の方々にご協力いただき、ホームセンターの駐車場をお借りして実現にこぎつけました。総勢13人の学生

チームで「スーパーボールすくい」「かき氷」「ゼリーフカミ」「アンパンマン風船」などを準備。「喜んでもらうためにはまずは自分たちが楽しもう!ボランティアとしてだけではなく、家族のように接しよう!」を合言葉にお祭りを楽しみました。その結果、300~400人の方々が来てくださり、大人の学生の子どもたちの笑顔が溢れていました。

この活動のために真剣に議論し、力を合わせたチームの仲間や、東北で出会った方々、スタッフのみなさんは私の人生の宝物です。

「ボランティア」と聞くと、「照れくさい」「自分にはできない」と感じる人もいるかもしれません。でも動機は何でもいいし、立派じゃなくていいんです。僕も最初は「他大学の友だちをつくりたい」という動機から始めました。活動をしていく中で広がる人々のつながり、笑顔、自分自身の成長もありました。

「誰か」ではなく、一人ひとりが考えていく必要があります。でも動機は何でもいいし、立派じゃないんです。僕も最初は「他大学の友だちをつくりたい」という動機から始めました。活動を通して出会えた人々、経験は今後も決して忘れません。人のつながり、支えてくれる方々への感謝を忘れず、自分にできることを続けていく。そんな社会人になりたいと強く思います。

震災から3年で、この3人の学生のように、実際に被災地へ行き被災した方々と向き合うことを実現させた力は何だったのでしょうか。

多くの人が、2011年3月11日に東北で起きたことを映像で目じとしたとき、大変なことが起きていると驚いたことでしょう。それから3年で、この3人の学生のように、実際に被災地へ行き被災した方々と向き合うことを実現させた力は何だったのでしょうか。

震災後、被災地で起きていることを想像でき、力、被災して辛い中で耐えている方々に共感することのできる力、そしてその思いを行動に移す力、またボランティア情報などを収集し行動を実現させる力、これらが合ったものではないかと思います。

私自身、学生ボランティアバスのスタッフ

震災後、被災地で起きていることを想像でき、力、被災して辛い中で耐えている方々に共感することのできる力、そしてその思いを行動に移す力、またボランティア情報などを収集し行動を実現させる力、これらが合ったものではないかと思います。

として、3回宮城県名取市を訪問しました。これからも、学生の思いと行動を甲南大学として支援・応援する体制づくりにかかるつたいたいたいと思っています。そして、何よりも、ボランティアを通じて紡いだ被災地の方々とのつながりを、これからも継続させたいと

立派じゃなくていい。

昨年3月に「大学コンソーシアムひょうご神戸」による「夏休み学生ボランティアバス」のシンポジウムに参加しました。ボランティア経験のない自分が役に立てるのか不安だったので、尚絅学院大学(宮城県)の学生の「言が背中を押してくれました。

「神戸の学生が、僕たちの地元・東北のこと

を話し合つてくださっているだけでうれしい、元気になる」ということばです。

「夏休み学生ボランティアバス」では、子どもを対象にした縁日を企画。チームの副リーダーとして実施場所を探すなど苦労もしましたが、スタッフ(神戸市社会福祉協議会や甲南大学教職員の方々にご協力いただき、ホームセンターの駐車場をお借りして実現にこぎつけました。総勢13人の学生

チームで「スーパーボールすくい」「かき氷」「ゼリーフカミ」「アンパンマン風船」などを準備。「喜んでもらうためにはまずは自分たちが楽しもう!ボランティアとしてだけではなく、家族のように接しよう!」を合言葉にお祭りを楽しみました。その結果、300~400人の方々が来てくださり、大人の学生の子どもたちの笑顔が溢れていました。

この活動のために真剣に議論し、力を合わせたチームの仲間や、東北で出会った方々、スタッフのみなさんは私の人生の宝物です。

「ボランティア」と聞くと、「照れくさい」「自分にはできない」と感じる人もいるかもしれません。でも動機は何でもいいし、立派じゃなくていいんです。僕も最初は「他大学の友だちをつくりたい」という動機から始めました。活動をしていく中で広がる人々のつながり、笑顔、自分自身の成長もありました。

「誰か」ではなく、一人ひとりが考えていく必要があります。でも動機は何でもいいし、立派じゃないんです。僕も最初は「他大学の友だちをつくりたい」という動機から始めました。活動を通して出会えた人々、経験は今後も決して忘れません。人のつながり、支えてくれる方々への感謝を忘れず、自分にできることを続けていく。そんな社会人になりたいと強く思います。

震災後、被災地で起きていることを想像でき、力、被災して辛い中で耐えている方々に共感することのできる力、そしてその思いを行動に移す力、またボランティア情報などを収集し行動を実現させる力、これらが合ったものではないかと思います。

私自身、学生ボランティアバスのスタッフ

震災後、被災地で起きていることを想像でき、力、被災して辛い中で耐えている方々に共感することのできる力、そしてその思いを行動に移す力、またボランティア情報などを収集し行動を実現させる力、これらが合ったものではないかと思います。

として、3回宮城県名取市を訪問しました。これからも、学生の思いと行動を甲南大学として支援・応援する体制づくりにかかるつたいたいたいと思っています。そして、何よりも、ボランティアを通じて紡いだ被災地の方々とのつながりを、これからも継続させたいと

立派じゃなくていい。

昨年3月に「大学コンソーシアムひょうご神戸」による「夏休み学生ボランティアバス」のシンポジウムに参加しました。ボランティア経験のない自分が役に立てるのか不安だったので、尚絅学院大学(宮城県)の学生の「言が背中を押してくれました。

「神戸の学生が、僕たちの地元・東北のこと

を話し合つてくださっているだけでうれしい、元気になる」ということばです。

「夏休み学生ボランティアバス」では、子どもを対象にした縁日を企画。チームの副リーダーとして実施場所を探すなど苦労もしましたが、スタッフ(神戸市社会福祉協議会や甲南大学教職員の方々にご協力いただき、ホームセンターの駐車場をお借りして実現にこぎつけました。総勢13人の学生

チームで「スーパーボールすくい」「かき氷」「ゼリーフカミ」「アンパンマン風船」などを準備。「喜んでもらうためにはまずは自分たちが楽しもう!ボランティアとしてだけではなく、家族のように接しよう!」を合言葉にお祭りを楽しみました。その結果、300~400人の方々が来てくださり、大人の学生の子どもたちの笑顔が溢れていました。

この活動のために真剣に議論し、力を合わせたチームの仲間や、東北で出会った方々、スタッフのみなさんは私の人生の宝物です。

「ボランティア」と聞くと、「照れくさい」「自分にはできない」と感じる人もいるかもしれません。でも動機は何でもいいし、立派じゃなくていいんです。僕も最初は「他大学の友だちをつくりたい」という動機から始めました。活動をしていく中で広がる人々のつながり、笑顔、自分自身の成長もありました。

「誰か」ではなく、一人ひとりが考えていく必要があります。でも動機は何でもいいし、立派じゃないんです。僕も最初は「他大学の友だちをつくりたい」という動機から始めました。活動を通して出会えた人々、経験は今後も決して忘れません。人のつながり、支えてくれる方々への感謝を忘れず、自分にできることを続けていく。そんな社会人になりたいと強く思います。

震災後、被災地で起きていることを想像でき、力、被災して辛い中で耐えている方々に共感することのできる力、そしてその思いを行動に移す力、またボランティア情報などを収集し行動を実現させる力、これらが合ったものではないかと思います。

私自身、学生ボランティアバスのスタッフ

震災後、被災地で起きていることを想像でき、力、被災して辛い中で耐えている方々に共感することのできる力、そしてその思いを行動に移す力、またボランティア情報などを収集し行動を実現させる力、これらが合ったものではないかと思います。

として、3回宮城県名取市を訪問しました。これからも、学生の思いと行動を甲南大学として支援・応援する体制づくりにかかるつたいたいたいと思っています。そして、何よりも、ボランティアを通じて紡いだ被災地の方々とのつながりを、これからも継続させたいと

立派じゃなくていい。

昨年3月に「大学コンソーシアムひょうご神戸」による「夏休み学生ボランティアバス」のシンポジウムに参加しました。ボランティア経験のない自分が役に立てるのか不安だったので、尚絅学院大学(宮城県)の学生の「言が背中を押してくれました。

「神戸の学生が、僕たちの地元・東北のこと

を話し合つてくださっているだけでうれしい、元気になる」ということばです。

「夏休み学生ボランティアバス」では、子どもを対象にした縁日を企画。チームの副リーダーとして実施場所を探すなど苦労もしましたが、スタッフ(神戸市社会福祉協議会や甲南大学教職員の方々にご協力いただき、ホームセンターの駐車場をお借りして実現にこぎつけました。総勢13人の学生

チームで「スーパーボールすくい」「かき氷」「ゼリーフカミ」「アンパンマン風船」などを準備。「喜んでもらうためにはまずは自分たちが楽しもう!ボランティアとしてだけではなく、家族のように接しよう!」を合言葉にお祭りを楽しみました。その結果、300~400人の方々が来てくださり、大人の学生の子どもたちの笑顔が溢れていました。

この活動のために真剣に議論し、力を合わせたチームの仲間や、東北で出会った方々、スタッフのみなさんは私の人生の宝物です。

「ボランティア」と聞くと、「照れくさい」「自分にはできない」と感じる人もいるかもしれません。でも動機は何でもいいし、立派じゃなくていいんです。僕も最初は「他大学の友だちをつくりたい」という動機から始めました。活動をしていく中で広がる人々のつながり、笑顔、自分自身の成長もありました。

「誰か」ではなく、一人ひとりが考えていく必要があります。でも動機は何でもいいし、立派じゃないんです。僕も最初は「他大学の友だちをつくりたい」という動機から始めました。活動を通して出会えた人々、経験は今後も決して忘れません。人のつながり、支えてくれる方々への感謝を忘れず、自分にできることを続けていく。そんな社会人になりたいと強く思います。

震災後、被災地で起きていることを想像でき、力、被災して辛い中で耐えている方々に共感することのできる力、そしてその思いを行動に移す力、またボランティア情報などを収集し行動を実現させる力、これらが合ったものではないかと思います。

私自身、学生ボランティアバスのスタッフ

震災後、被災地で起きていることを想像でき、力、被災して辛い中で耐

「死ぬ」って、「生きる」って、どういうことなんだろう？

死 生 学

を学びませんか？

生と死について学ぶ「死生学」。2013年度から文学部で開講され、多くの学生から支持を得ている人気の講義です。

”生と死“という身近で、かつ普遍的なテーマであることに加え、映画から生や死を読み取りディスカッションしたり、テーマに沿って4コマ漫画を描いたりといった講義スタイルも人気の秘密のようです。

担当の上村くにこ名誉教授に、講義の様子やねらいについて伺いました。

みなさんは「死生学」ということばを、お聞きになつたことはあるでしょうか？

2013年度の後期から文学部の1年生を対象に「死生学」の講義を始めたときは、よく「シセイガク？それ何？」と聞かれたものでした。たしかにこのことばが定着し始めたのは1980年代のこと、つい最近までこの学問の呼び名さえもよく知られないなかつたのです。

「死生学」とは「死ぬ」とはどういうことなのかを考えることによって、「生きる」とはどういうことなのかを知ろうとする学問と、私は考えています。今は人口の4人に1人が65歳以上の高齢者という時代であり、2025年になると1人の高齢者を2人で支えねばならなくなると統計は告げています。

今18歳の若者は10年後、高齢者とどんな関係をもてるでしょうか？

また災害やいじめ、自殺などによつて、多くの命が失われることをどう受け止めらいいのでしょうか？

私が若者向けの死生学をやつてみたいと思い始めたのは、エッセーの添削を何年もやつてきた体験からです。家族のことをテーマに書いてもらつと、必ずといっていいほど、幼年時代に祖母や祖父にいかに可愛がつてもらつたかという思い出が書かれます。

今は人口の4人に1人が65歳以上の高齢者といふ時代であります。しかし彼らが病気になると、ぱたりと記述がなくなり、次のシーンはお葬式で、

そのころのことをもつと具体的に思い出すように水を向けても、何も出できません。

老いや病や死をそばで見る体験が本当に少ないのでなあと実感しました。

多死社会に突入が秒読み段階といわれるこの時代に、老いや死はますますタブー化し、特に子どもには見せてはいけないものとなりました。

そんな時代に、まずは学生に自分もいつかは死ぬということを実感し、

多様な死生観を学びながら、自身の死生観を培つてもらうことは、火急の任務ではないかと思ったわけです。

さて死生学はとても学際的な学問です。できるだけ広い視野を保ちながら学生の興味を引くような題材を厳選し、それとなく学間に引き込むようなシラバスを作るのに苦労しました。もつとも心を碎いたのは、6・7人のグループに分けてディスカッションが活発になるような

テーマを提供することでした。死について話すことは、高齢者にとってさえも難しいこと、若者にとっては初めての体験だろうと思つたからです。

不安と期待で始めた講義でしたが、フタを開けてみてびっくり。まずは受講生は、多くて100人と踏んでいたのが240人の学生が詰めかけたのです。そんな多人数でも、どうしても実施したかった

ディスカッションの時間には学生が思いがけない問題提起を次々としてくるので、こちらは都度軌道修正することになりました。

まずは導入で映画『おくりびと』を見せて「死は穢(けが)れ」とみる考え方に対する注目するつもりでしたが、納棺師が魚の白子を箸でつまみながら「これもご遺体、それがおいしいんだよな」と口の中に放り込むシーンに学生たちは大いに反応して、「食べること」についても議論することになりました。

自分の命を保持するためには、ほかの命をいただくことをどう思つかという難問に最初から突入したわけです。次に用意したテキストは宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』で、「死後の旅」というテーマで話すつもりでしたが、急きよ虫を食べて生きてきた自分を反省する「サソリ」のテーマにも焦点をあてるようになりました。

このように授業の方向は学生がハンドルを握り、教員はあとから荷物をまとめて走るというスタイルになりました。日本人の死生観が、仏教・神道のみならず、民俗的な風習が複雑に混交した奥深い文化を反映していることも納得してもらいました。

講義のクライマックスは漫画が示すさまざまな死生観を概観したのちに、

自分でも「私のしあわせ」というテーマで4コマ漫画を作つてもらうというものでした。

学生たちの議論を聞くと「生きること」と「死ぬこと」と「幸」と「不幸」は紙の裏表のように一体であると主張する学生が多かつたのですが、ほとんどの漫画がこの考えを反映しているのにはびっくりしました。

人気を博した作品を一つご紹介しましょう。人間のポジティブな傾向を白ドグマちゃん、ネガティブな側面を黒ドグマくんというキャラクターに仕立てています。黒ドグマくんは必ずしも悪いヤツでなくて、白ドグマちゃんが落ち込んでいると「飛び下りろよ」という乱暴なことばを投げつけますが、逆にそれが白ドグマちゃんの中に眠っている「生きたい」という本能を引き出してくれます。ユウレイさんも「たたるぞ」と登場して三つ巴になつてじやれ合つても壊れない関係が「ほんとうのしあわせ」ではないかといふ漫画です。

「死ぬ」ことは「生きる」ことの終わりではなく完成であり、命から命へのバトンであるという「死生学」の究極のメッセージが、個々の学生がこれから生きていく中で、一筋の光になれたらと願っています。



甲南大学名誉教授
うえむら
上村 くにこ 氏

1944年生まれ。1967年大阪大学文学部卒、1977年大阪大学大学院文学研究科仏文学専攻博士課程単位取得退学。1978年パリ第四大学 第三課程博士学位取得。1981年甲南大学文学部助教授、1988年同教授を経て、2013年甲南大学名誉教授。現在はNPO法人想像文化研究組織(ICI)理事長として、豊かな高齢社会の実現をめざし活動中。

【人気を博した学生の4コマ漫画】



作:文学部人間科学科 4年次 足立 朝之さん





後ろを振り返りながら、 前進する智慧。



華嚴宗管長
東大寺第221世別當

筒井寛昭
大僧正

1968年文学部卒

時代を経て伝えられてきた智慧を次代へ引き継ぐことが、今を生きる義務。

未来を見据える、未来につなげる。

東大寺が創建された奈良時代、ここにはおよそ1000人くらいの僧がいました。それが今何人いるかご存知でしょうか。わずか200人前後です。明治維新で行われた廢仏毀釈により、寺は深刻なダメージを受けました。明治政府に寺領の返却を求められ、経済的な基盤をすべて失つてしまつたのです。しかも東大寺は学問寺です。普通のお寺のように檀家さんに支えられるわけではありません。そのため経済的に大変な苦境に陥つてしまい、明治以降は僧侶の数が激減してしまったのです。

一方で、大仏殿は木造建築としてはあまりに巨大な構造物であるために、定期的な修復が必要です。明治初期、今から140年ほど前にも大規模な修理計画が検討されました。とはいっても国からの援助はまったく期待できない状況です。そこで考えられたのが、広く国民に支援を呼びかけること。結果的に多くの人からの貴重な寄付を得ることができ、明治の大修理は無事に行われました。

今では大仏さんを拝観に来られた人たちから入堂料で、お寺が維持されて守られています。そもそも東大寺は、國家の安寧と隆昌を祈願して建てられた寺です。その建立時にも、当時の多くの人の力が寄せられました。

1200年以上も続いてきた東大寺の歴史は、これから先の世の中にもしっかりとつなげていかなければなりません。そのためには今後も、国民のみなさんに守つていただきることが必要です。未来を見据えて、長い歴史をさらに先へと紡いでいく。そんな思いをみなさんにお伝えして、一人でも多くの方に共感していただくのが、別当としての私の役目だと心得ています。

言い伝えには、伝えるべき意味がある。

奈良東大寺といえば「大仏さん」で知られる、日本で最も有名なお寺の一つ。2013年5月、その寺の最高責任者にあたる別當の第221世に、本学卒業生の筒井寛昭氏が就任されました。今ではすっかり観光の名所となっている東大寺ですが、その本質は学問寺、華嚴宗の大本山として仏の教えを追究する僧侶たちが集まる寺でした。東日本大震災から3年が経ち、被災地では建物などの復旧はある程度進んでいます。けれども、震災を受けた人々の心の復興はまだまだともいえます。筒井別當に、仏教の視座から、心のもちようを語つていただきました。

東日本大震災は、まさに稀有の出来事でした。被害に遭われた方の心情を察すれば、かけるべきことばさえ決して軽々とは浮かんでくるものではありません。それでも、今回被災された方々に、一つだけお願ひしたいことがあります。それは「伝えること」です。

今回の震災で、ぜひ見過ごさないでいただきたいのが、被害を受けた地域でも古いお寺や神社ほど意外に無事に残っている事実です。これは一体何を意味しているのでしょうか。

はるか昔の平安時代にも東北地方は貞觀地震による大津波に襲われ、甚大な被害を受けました。だからその後人々は、津波が来ても安全などころに建物を作ってきたのです。ところがそうした昔の智慧や言い伝えが、長い時間の中で失われていったのでしょう。

伝統とは、後世にまでしっかりと語り継ぐべき智慧だと私は思います。時代が進み社会が移り変わっていく中で、古いものの価値が見落とされがちになるのは、やむをえない定めなのかも知れません。けれども東大寺の歴史がまさに物語っているように、長い時代を経て伝えられてきた智慧を、次の世代へときちんと引き継いでいくのが、今を生きる私たちの義務です。

時代を超えた人と人のつながりは、これまでそうやって保たれてきました。ところが今は同じ時代を生きる人たちの間でのつながりさえ、失われがちな世の中になっています。たとえば一昔前までなら、地域の子どもは地域で面倒を見るといった意識が、多くの人に共有されていました。だから道を歩いている子どもを見れば、「ああ、あの子は誰それさんのところの子どもやな」とわかつていたし、それなりに気にかけてもきたのです。そんな気配りが今、どれほど残っているのでしょうか。

地域の人間が集まつてコミュニケーションを取り、地域のことを共に考えていく。本来はそれが社会の一番小さな単位のはずです。空間と時間を結ぶつながりの大切さを思い直すこと、これも今回の震災から私たちにいろいろな施しをすることが、お布施の本来のあり方だと思います。

自分の一番大切なものを喜んで与える。

命あるものには、必ず終局が訪れます。その終局に向けて、自分の気持ちをいかに幸せなものへと高めていくのか。仏教には、この世に生かされたまま、御仏の境地に少しでも近づくための6つの修行が定められています。布施（ふせ）、持戒（じかい）、忍辱（にんにく）、精進（じょううじん）、禪定（ぜんじょう）、智慧（ちえ）で、これらを総称して「六波羅蜜（ろくはらみつ）」と呼びます。

中でも、一番最初に出てくるのが布施波羅蜜（ふせはらみつ）です。つまりお布施をすることが自分を高める一番の方法であり、仏教修行の中でも最も大切とされているのです。布施は今では布を施すと書きますが、当初は「普施」、普く施すと表されていました。文字通りもなくすべての人にいろいろな施しをすることが、お布施の本来のあり方です。

これが簡単なようで実はとても難しい。たとえば何かを人にあげるとしましよう。そのとき、あげる人ともらった人の間に上下関係が生まれてしまえば、それはもうお布施とはいえません。バザーなどで自分の家でいらないものや古くなつたものを出品するのも、お布施ではないのです。



正しい道を歩めているかを確かめるために、一度立ち止まって自分の軌跡を見直す。

プロフィール

1946年、奈良県生まれ。父親の跡を継ぎ、1955年より東大寺に入寺し、1958年に度慶。1968年、甲南大学文学部社会学科卒業後、東大寺の寺務所詰となり、本格的に寺務に携わる。1996年に権大僧正となり、以降、東大寺財務執事、東大寺執事長、東大寺福社事業団理事長などを経て、2013年5月より第221世東大寺別当。奈良甲南会会长。

ち止まつて自分の軌跡を見直してみれば、正しい道を歩めているかどうかは一目瞭然となるはずです。人は基本的には前を向いてしか進めないものです。だからこの辺りでひとつ、少し後ろを振り返りながら前進する智慧を身につけてはいかがでしょうか。

さらにいえば進む方向が、みんな同じである必要もないはずです。とかく日本人は、一つの考え方とらわれがちです。けれども、たとえば東大寺を支えている太い円柱を思い浮かべてみてください。円柱を上から見れば正円だけれど、横から見れば長方形にしか見えないではありませんか。たとえ同じ対象を見ていたとしても、自分の立ち位置によって見え方は、まったく違つてくるのです。

それだけでなくとも、人の目は簡単に錯覚を起こすようにできています。みんなが世の中を多かれ少なかれ錯覚しながら見ていくのだとすれば、自分とは違う意見があつたとしても、それであたり前ぐらいに思えるはず。そうなれば不要な説いを避けられるでしょう。

とはいっても、円柱を正円と見ようと長方形と見ようと、少なくとも同じ対象を見ていることだけは間違いないのです。お互に同じ方向を向いているのだから、見え方が違つたとしても相手を受け入れる気持ちを大切にしていただきたいと思います。

今回の震災で被害を受けた方たちには今後、ぜひ日本の立て直しにかかるわっていただきたいと思います。実際に、その活動で日本を元気にしてらっしゃる方も多く出でてこらえているように思います。たとえば各地で災害について振り返り、どのような準備や心構えが必要か説いて回つている方がいます。そんな方たちの話には真実味があり強い説得力があります。被災された方には、語り部として、自分たちが経験されたことを、未来に伝えていくともらいたい。それが前を向いて進むことだと思います。

そして、被災された方が語り部となれるよう、私たちは彼らの気持ちをしっかりと受け止めることです。そのうえで本来の意味でのお布施に励むことが必要だと私は考えています。

次の世代への語り部。

被災された方に對して、過去にとらわれるなどいっても、それは無理なことです。あれだけの被害を残した震災を忘れ去るのは、生易しいことはありません。むしろ來し方を振り返ることは良いことだと思えば、気も樂になるのではないでしようか。

これまでの日本はどうも少しおかしな方向に走つてきたような気がしてなりません。地域のコミュニティーが崩れてしまつたことが、その象徴です。パブル景気のころから、誰もがお金儲けばかりを求め、自分さえ良ければという風潮が広まりすぎたように思えます。

自分の行動を振り返ることなく、みんながひたすら前へ前へと走つてきた。だから進んでいる道が曲がっていたり、自分の向かつている先が本來あるべきところから外れていても、気がつかない。そんなときに少し立ても後押ししてあげたいところです。

お布施とは、自分が大切にしているものを、捨てるつもりで人に差し出すことです。自分にとつて一番貴重なものを人に差し出す。だからといって出し手は、惜しいことをしたなどと未練に思つてはいけません。しかももの、つまり落ちているものを拾つたようなものだと、そういう気持ちでそれだけでは不十分で、お布施が修行として成立するためには、受け手の協力も必要なのです。

お布施を受けた人は、自分が不幸だから何かをもらつたのだと卑屈になつてはいけません。自分が受け取つたものは、お布施をした人が捨てたもの、つまり落ちているものを拾つたようなものだと、そういう気持ちで受け取ることです。

人に何かを施す「布施波羅蜜」は、出し手と受け手が同じ立場でやり取りをして、初めて修行として成立します。施す対象は物だけとは限りません。物施(ぶっせ)と法施(ほうせ)と呼び、たとえば心の病などで困つている人に手を差し伸べたり、学校を失つた子どもたちに先生代わりに話をじてあげることは法施となります。

今回の震災に遭われた方たちに、私たちはどう接すべきなのでしょうか。被災された方をきちんと見て、その人が必要とされているものをお布施することです。しかもお布施なのだから相手と自分が同じ立場でなければなりません。かわいそうにと思うのは自然な心情ですが、それで本当に同じ立場といえるのかどうかを考え直す必要があるでしょう。

何より大切なのは、被災された方々が、ご自分のこれからと向き合い未来を前向きにとらえられるよう支援することです。人の気持ちをある方向に向けることはできるにせよ、そこから先へと足を一步踏み出すかどうかは、その人の気持ちにかかりています。みんなで力を合わせて、少しでも後押ししてあげたいところです。

自由闊達な甲南で 文学と人生の素地を 形成しました。



中井久夫氏
なかい ひさお

1934年奈良県生まれ。甲南中学・高等学校を経て、1959年京都大学医学部卒。精神医学者として治療と研究に従事されました。1997年4月に甲南大学特任教授、2004年4月には兵庫県こころのケアセンター所長に就任。多くの著書を発表されるなど評論・翻訳家としてもご活躍され、これら活動の功績に対して、昨年秋、文化功労者の顕彰を受けられました。



2013年12月、杉村芳美学長から
甲南大学名誉博士号が授与されました。

日本を代表する精神科医であり、評論・翻訳家としてもご活躍の甲南大学元教授の中井久夫氏が、平成25年度の文化功労者に選ばれ、甲南大学名誉博士号も授与されました。
これを記念して、甲南で過ごされた中学・高校時代の思い出から、多くの著書や翻訳本を発表されてきた文学者としての横顔など、「知の巨人」にさまざまなお話を伺いました。

友人・知人のおかげで
東京での顕彰式に出席できました。

文化功労者に選ばれた、という第一報を受けたとき、まずびっくりしました。「これは何事か。文化功労者とは一体何なんだろう」と。その後、文化庁から続々とファックスで送られてくる資料に目を通して、ようやく文化功労者が何であるか、

文化功労者には、これまでの評論や翻訳の仕事に対しても顕彰

されたものですが、こうした私の文学の素地が形成されたの

は、甲南で過ごした中学・高校のころです。先生方の影響がと

ても大きいのです。当時の甲南は20代前半から30代の若手の

先方が多く、先生方のほとんどが戦争中に勤労動員のために

軍需工場で働き、戦後教壇に復帰されました。そして終戦を迎えて、初めての学年として迎えてくださったのが私たちだつたのです。先生方にも開放感があおりだと思います。

その一人が、国語を担当してくれた本田義憲先生でした。中学1年生のときの最初の授業に入つてから、ガラス窓を開け放ち、青空の方をご覧になってこうおっしゃいました。「空が青い、かなしいですね」と。

この「かなしい」は、ひらがなで書く万葉集の表現に近いもの、「悲しい」や「哀しい」ではなく、「愛しい」の意味だと思います。私たちはそのことばに大変な感銘を受け、卒業後に開催されるクラス会では同級生たちがたびたび先生の物まねをしていました。

本田先生は万葉集を講義していくさつたのですが、私たちには万葉集に収められた歌を随分と暗記しました。屋外での授業もあり、のびやかな空気のもとで学ぶことができました。私も甲南大学の文学部に戻ったときに、青天井のもとで講義をしていました。ヴァレリーは、自分が教える立場になりました。

もう一人私たちに大きな影響を与えてくださったのが北山正迪先生です。北山先生は、新古今和歌集を1年間講義するという、高校では珍しい授業をしてくださいました。その新古今の授業に、フランスのポール・ヴァレリーの詩が出てくるのです。ヴァレリーは、私がその研究者になりたいとまで考えた詩人です。ヴァレリーには華やかな詩が多く、その意義を感じました。

北山先生は、新古今和歌集を1年間講義するという、高校では珍しい授業をしてくださいました。その新古今の授業に、フランスのポール・ヴァレリーの詩が出てきます。ヴァレリーをはじめとする外国詩の翻訳などを続けてきました。外国の詩の翻訳をしているうちは、その詩を暗誦

日本を代表する精神科医であり、評論・翻訳家としてもご活躍の甲南大学元教授の中井久夫氏が、

平成25年度の文化功労者に選ばれ、甲南大学名誉博士号も授与されました。

これを記念して、甲南で過ごされた中学・高校時代の思い出から、多くの著書や翻訳本を発表されてきた

文学者としての横顔など、「知の巨人」にさまざまなお話を伺いました。

友人・知人のおかげで
東京での顕彰式に出席できました。

文化功労者に選ばれた、という第一報を受けたとき、まず

びっくりしました。「これは何事か。文化功労者とは一体何なんだろう」と。その後、文化庁から続々とファックスで送られ

てくる資料に目を通して、ようやく文化功労者が何であるか、

文化功労者には、これまでの評論や翻訳の仕事に対しても顕彰

されたものですが、こうした私の文学の素地が形成されたの

は、甲南で過ごした中学・高校のころです。先生方の影響がと

ても大きいのです。当時の甲南は20代前半から30代の若手の

先方が多く、先生方のほとんどが戦争中に勤労動員のために

軍需工場で働き、戦後教壇に復帰されました。そして終戦を迎えて、初めての学年として迎えてくださったのが私たちだつたのです。先生方にも開放感があおりだと思います。

その一人が、国語を担当してくれた本田義憲先生でした。

中学1年生のときの最初の授業に入つてから、ガラス窓を開け放ち、青空の方をご覧になってこうおっしゃいました。「空が青い、かなしいですね」と。

この「かなしい」は、ひらがなで書く万葉集の表現に近いもの、「悲しい」や「哀しい」ではなく、「愛しい」の意味だと思います。私たちはそのことばに大変な感銘を受け、卒業後に開催されるクラス会では同級生たちがたびたび先生の物まねをしていました。

本田先生は万葉集を講義していくさつたのですが、私たちには万葉集に収められた歌を随分と暗記しました。屋外での授業もあり、のびやかな空気のもとで学ぶことができました。私も甲南大学の文学部に戻ったときに、青天井のもとで講義をしていました。ヴァレリーは、自分が教える立場になりました。

もう一人私たちに大きな影響を与えてくださったのが北山正迪先生です。北山先生は、新古今和歌集を1年間講義するという、高校では珍しい授業をしてくださいました。その新古今の授業に、フランスのポール・ヴァレリーの詩が出てきます。ヴァレリーをはじめとする外国詩の翻訳などを続けてきました。外国の詩の翻訳をしているうちは、その詩を暗誦

日本を代表する精神科医であり、評論・翻訳家としてもご活躍の甲南大学元教授の中井久夫氏が、

平成25年度の文化功労者に選ばれ、甲南大学名誉博士号も授与されました。

これを記念して、甲南で過ごされた中学・高校時代の思い出から、多くの著書や翻訳本を発表されてきた

文学者としての横顔など、「知の巨人」にさまざまなお話を伺いました。

友人・知人のおかげで
東京での顕彰式に出席できました。

文化功労者に選ばれた、という第一報を受けたとき、まず

びっくりしました。「これは何事か。文化功労者とは一体何なんだろう」と。その後、文化庁から続々とファックスで送られ

てくる資料に目を通して、ようやく文化功労者が何であるか、

文化功労者には、これまでの評論や翻訳の仕事に対しても顕彰

されたものですが、こうした私の文学の素地が形成されたの

は、甲南で過ごした中学・高校のころです。先生方の影響がと

ても大きいのです。当時の甲南は20代前半から30代の若手の

先方が多く、先生方のほとんどが戦争中に勤労動員のために

軍需工場で働き、戦後教壇に復帰されました。そして終戦を迎えて、初めての学年として迎えてくださったのが私たちだつたのです。先生方にも開放感があおりだと思います。

その一人が、国語を担当してくれた本田義憲先生でした。

中学1年生のときの最初の授業に入つてから、ガラス窓を開け放ち、青空の方をご覧になってこうおっしゃいました。「空が青い、かなしいですね」と。

この「かなしい」は、ひらがなで書く万葉集の表現に近いもの、「悲しい」や「哀しい」ではなく、「愛しい」の意味だと思います。私たちはそのことばに大変な感銘を受け、卒業後に開催されるクラス会では同級生たちがたびたび先生の物まねをしていました。

本田先生は万葉集を講義していくさつたのですが、私たちには万葉集に収められた歌を随分と暗記しました。屋外での授業もあり、のびやかな空気のもとで学ぶことができました。私も甲南大学の文学部に戻ったときに、青天井のもとで講義をしていました。ヴァレリーは、自分が教える立場になりました。

もう一人私たちに大きな影響を与えてくださったのが北山正迪先生です。北山先生は、新古今和歌集を1年間講義するという、高校では珍しい授業をしてくださいました。その新古今の授業に、フランスのポール・ヴァレリーの詩が出てきます。ヴァレリーをはじめとする外国詩の翻訳などを続けてきました。外国の詩の翻訳をしているうちは、その詩を暗誦

日本を代表する精神科医であり、評論・翻訳家としてもご活躍の甲南大学元教授の中井久夫氏が、

平成25年度の文化功労者に選ばれ、甲南大学名誉博士号も授与されました。

これを記念して、甲南で過ごされた中学・高校時代の思い出から、多くの著書や翻訳本を発表されてきた

文学者としての横顔など、「知の巨人」にさまざまなお話を伺いました。

友人・知人のおかげで
東京での顕彰式に出席できました。

文化功労者に選ばれた、という第一報を受けたとき、まず

びっくりしました。「これは何事か。文化功労者とは一体何なんだろう」と。その後、文化庁から続々とファックスで送られ

てくる資料に目を通して、ようやく文化功労者が何であるか、

文化功労者には、これまでの評論や翻訳の仕事に対しても顕彰

されたものですが、こうした私の文学の素地が形成されたの

は、甲南で過ごした中学・高校のころです。先生方の影響がと

ても大きいのです。当時の甲南は20代前半から30代の若手の

先方が多く、先生方のほとんどが戦争中に勤労動員のために

軍需工場で働き、戦後教壇に復帰されました。そして終戦を迎えて、初めての学年として迎えてくださったのが私たちだつたのです。先生方にも開放感があおりだと思います。

その一人が、国語を担当してくれた本田義憲先生でした。

中学1年生のときの最初の授業に入つてから、ガラス窓を開け放ち、青空の方をご覧になってこうおっしゃいました。「空が青い、かなしいですね」と。

この「かなしい」は、ひらがなで書く万葉集の表現に近いもの、「悲しい」や「哀しい」ではなく、「愛しい」の意味だと思います。私たちはそのことばに大変な感銘を受け、卒業後に開催されるクラス会では同級生たちがたびたび先生の物まねをしていました。

本田先生は万葉集を講義していくさつたのですが、私たちには万葉集に収められた歌を随分と暗記しました。屋外での授業もあり、のびやかな空気のもとで学ぶことができました。私も甲南大学の文学部に戻ったときに、青天井のもとで講義をしていました。ヴァレリーは、自分が教える立場になりました。

もう一人私たちに大きな影響を与えてくださったのが北山正迪先生です。北山先生は、新古今和歌集を1年間講義するという、高校では珍しい授業をしてくださいました。その新古今の授業に、フランスのポール・ヴァレリーの詩が出てきます。ヴァレリーをはじめとする外国詩の翻訳などを続けてきました。外国の詩の翻訳をしているうちは、その詩を暗誦

日本を代表する精神科医であり、評論・翻訳家としてもご活躍の甲南大学元教授の中井久夫氏が、

平成25年度の文化功労者に選ばれ、甲南大学名誉博士号も授与されました。

これを記念して、甲南で過ごされた中学・高校時代の思い出から、多くの著書や翻訳本を発表されてきた

文学者としての横顔など、「知の巨人」にさまざまなお話を伺いました。

友人・知人のおかげで
東京での顕彰式に出席できました。

文化功労者に選ばれた、という第一報を受けたとき、まず

びっくりしました。「これは何事か。文化功労者とは一体何なんだろう」と。その後、文化庁から続々とファックスで送られ

てくる資料に目を通して、ようやく文化功労者が何であるか、

文化功労者には、これまでの評論や翻訳の仕事に対しても顕彰

されたものですが、こうした私の文学の素地が形成されたの

は、甲南で過ごした中学・高校のころです。先生方の影響がと

ても大きいのです。当時の甲南は20代前半から30代の若手の

先方が多く、先生方のほとんどが戦争中に勤労動員のために

軍需工場で働き、戦後教壇に復帰されました。そして終戦を迎えて、初めての学年として迎えてくださったのが私たちだつたのです。先生方にも開放感があおりだと思います。

その一人が、国語を担当してくれた本田義憲先生でした。

中学1年生のときの最初の授業に入つてから、ガラス窓を開け放ち、青空の方をご覧になってこうおっしゃいました。「空が青い、かなしいですね」と。

この「かなしい」は、ひらがなで書く万葉集の表現に近いもの、「悲しい」や「哀しい」ではなく、「愛しい」の意味だと思います。私たちはそのことばに大変な感銘を受け、卒業後に開催されるクラス会では同級生たちがたびたび先生の物まねをしていました。

本田先生は万葉集を講義していくさつたのですが、私たちには万葉集に収められた歌を随分と暗記しました。屋外での授業もあり、のびやかな空気のもとで学ぶことができました。私も甲南大学の文学部に戻ったときに、青天井のもとで講義をしていました。ヴァレリーは、自分が教える立場になりました。

もう一人私たちに大きな影響を与えてくださったのが北山正迪先生です。北山先生は、新古今和歌集を1年間講義するという、高校では珍しい授業をしてくださいました。その新古今の授業に、フランスのポール・ヴァレリーの詩が出てきます。ヴァレリーをはじめとする外国詩の翻訳などを続けてきました。外国の詩の翻訳をしているうちは、その詩を暗誦

日本を代表する精神科医であり、評論・翻訳家としてもご活躍の甲南大学元教授の中井久夫氏が、

平成25年度の文化功労者に選ばれ、甲南大学名誉博士号も授与されました。

これを記念して、甲南で過ごされた中学・高校時代の思い出から、多くの著書や翻訳本を発表されてきた

文学者としての横顔など、「知の巨人」にさまざまなお話を伺いました。

友人・知人のおかげで
東京での顕彰式に出席できました。

文化功労者に選ばれた、という第一報を受けたとき、まず

びっくりしました。「これは何事か。文化功労者とは一体何なんだろう」と。その後、文化庁から続々とファックスで送られ

てくる資料に目を通して、ようやく文化功労者が何であるか、

文化功労者には、これまでの評論や翻訳の仕事に対しても顕彰

されたものですが、こうした私の文学の素地が形成されたの

は、甲南で過ごした中学・高校のころです。先生方の影響がと

ても大きいのです。当時の甲南は20代前半から30代の若手の

先方が多く、先生方のほとんどが戦争中に勤労動員のために

軍需工場で働き、戦後教壇に復帰されました。そして終戦を迎えて、初めての学年として迎えてくださったのが私たちだつたのです。先生方にも開放感があおりだと思います。

してしまったことがあります。原詩を繰り返し読んでいると、あるとき、たとえば電車を待っているときには、良い訳ができます。何度も暗誦した詩や文は、良くて浮かび上がります。何度も暗誦した詩や文は、良い訳ができます。口を通して、日本語が見つかるのですね。私の詩の翻訳は北山先生の影響です。

甲南中学高校のころ、漢詩や万葉集、新古今和歌集などを暗誦していました。昔は暗誦するという文化がありました。が、最近はその文化は廃れてきているかもしれません。

法学部を辞めて医学部へ。

これは「しめた」と思いました。

ポール・ヴァレリーの研究者になろうかとも考えたのですが、結局、私は京都大学の法学部へ進みました。当時の人生のコースとして一般的なものは、サラリーマンになつて適当な時期に結婚し、子どもを育てるというのが精一杯。日本はおしゃれでいましたから、文学で飯を食うなどは遠い夢です。私も会社勤めをして、ひつそりと好きな文学を読もうと考えていました。

法学部への進学を決めたことで、北山先生は随分と怒られました。しかし、京都大学受験の際は、京都にお住まいだった北山先生のお宅に泊めていただき、無事に合格しました。大学に入るとき、仲間はみな就職に憧れて、社会に出ておられる先輩の方々に連絡を取り、いわゆるOB訪問をしていました。私も大阪の淀屋橋にある会社を見学させていただきました。学生になつたのですが、それがマイナスに働きました。このテープからあちらのテーブルに行くまでに、一生かかるのか、と。サラリーマンの生涯を見てしまつたような気がしたのです。その会社を出たとき、淀川の上を柳の花が舞つていてその光景を今も印象深く覚えています。

その後、私は結核を患つてしまつた。法学部への熱が冷めてしまつてしまつたこともあり、早々に休学届を出しました。学生診療所の医者に「君、休学したのか、ずいぶんと気が早いな」と言われたほどです。ヒドラジド※という新しい薬のおかげで治つたのですが、結核の経験があると企業の採用は非常に厳しくなります。当時結核は深刻な病で、休学していかなければ間違ひなく死んでいたことでしょう。

そこで決心しました。医学部へ進もうと。法学部を出て肩身

やめています。それは私への友情だったんだろうと、今では確信できます。

震災で思いました。この国の人ならきっと乗り越えるはずだと。

今年で阪神・淡路大震災から20年目を迎えます。震災当時、私は、神戸大学の精神科を主宰していましたが、このときに考えたことは、精神科医はどこでも入つていける、役に立つことができるということでした。うちのスタッフは応用がきく、そういう信頼感がありました。

しかし、避難所でのボランティアの仕事は負担が大きく、スタッフにも疲れが見えてきました。九州大学で講演する機会が多くなった私は「九州人はこういうときに必ず助けてくれる」という確信がありました。九州大学に電話をすると、教授はすぐその日のうちに2人を差し向ける、費用は九州大学の同窓会がもつと言つてくれました。それをスタッフに伝えたときのみんなのはつとした様子をよく覚えています。そして私が考えたのは、今まで日本の医師は大学医学部の枠を越えて互いに協力したことなどがかった。これはそのチャンスである、と。

阪神・淡路大震災が起きてすぐ、NTTから私宛てに伝言がありました。「ある方の仰せであるあなたの電話線を保証している」と。その電話を使って、東京におられた私の恩師である土居健郎先生といつでも話をすることができます。実は今、こういうことがあって困つております、こういうことが起きています。ですがどうすればいいでしょうか、そんなことを土居先生

の狭い思いをして会社勤めをするよりは、思い切つて医者になろうと。サラリーマン社会とは違ひ、医者なら、研究の道や臨床の道もある。勤務先に見込み違いがあつても、自分の専門分野を生かしてやり直しがきくではないか。自分は商売人向ではないと思うけれど、いろいろなことを調べるのは嫌いではない。先の診療所の医者に復学後に会いに行くと、その医者が結核で亡くなつてましたことも理由の一つです。弔い合戦のような気持ちもありました。

進路変更にとりたてて勇気はりませんでした。逆に「しめた」と思いました。もう、ああだ、こうだと思い迷わなくていい。考え方を切り替えることができました。

※ヒドラジド／イソニコチニ酸ヒドラジド。
結核の代表的な化学療法剤の一つ。

同じ大学で、同じ病を克服した。

仲間が人生を大きく左右しました。

医学部への転身を考えたとき、私の支えとなつてくれたのが同じ大学で学び、同じく結核を患つていた2人の友人の存在です。学生診療所の待合室で出会つた彼らと「テーベー（結核）3人組」を結成し、共に病を克服しました。一つのお寺の離れを共有して暮らしていきます。この3人組がその後の私の一生を大きく左右し、今でもお付き合いが続いているです。

甲南でもよい友人に恵まれ、卒業後のクラス会では仲間と会うのが楽しみでした。在学中はインフレなどで家計が苦しくなり学校を辞めていく生徒もいましたが、クラス会では、まず途中で辞めざるを得なかつた仲間をどう引き入れるかに力を注ぎました。連絡が途絶えていた仲間を探し当ててクラス会に呼んだところ、後日御札の手紙をもらい、クラスメート一同ともうれしかつたです。

忘れられない友人の一人に前田君がいます。裕福な家庭の前田君ですが、私たちのようにギリギリまで授業料を払わず、理由を尋ねたときに彼は、「利子が付くからね」という返事しかしません。しかし、彼が亡くなつてから、実は私に付き合つてくれたんだということに気づきました。私は家庭の事情で修学旅行に行けなかつたのですが、彼も結局、直前で取り

に報告・相談をしました。

震災直後、皇后陛下が土居先生にお尋ねになつたそうです。「西の方は大丈夫ですか」と。土居先生が「あそこにはしっかりと者がおります」と、私の名前をおつしやつたことから、土居先生と私のホットラインがつながるようになりました。

この度の文化功労者の顕彰式で東京へ行くにあたり、皇后陛下は、私がどんな人間だろうか、会いたいと思つておられたとお聞きしていました。そして東京でお目にかかるたびに、皇后の教訓が、東日本大震災にどのように生かされましたか」と。私は、お返事を差し上げました。

「当時を経験した者がリーダーになり、東日本大震災で動きました。たとえば、いち早くガソリンスタンドや物流の組合と相談して現地で案内ができる比較的ゆとりのある自治体を選んで支援するよう手配し、どういった役割が必要かを見抜き、県庁に報告しました」と。すると皇后陛下が「それを考えている」とお聞きしました。私は、男性ですか、女性ですか」とお尋ねになられたのです。私が「女性です」とお答えすると、大変ご満足されたご様子でした。

東日本大震災が起きたとき、私はこの國の人ならきっと対応できると思いました。空襲も数々の自然災害も何とか乗り越えてきた。この國の人なら、答案は書けるはずです。そして、リーダーとなる人が必ず出てくる。無理矢理リーダーを押し出すのではなく、自然に押し出されてくる。それがこの國の良さではないだろうかと思っています。



絵も心得る多才ぶり。
精神科医 アンリ・F・エランベルジェの
原作を基にした絵本『いろいろずきん』
(みすず書房)では、訳だけではなく挿絵も
描かれています。



リーダーのあり方を考えてみよう

クラブ活動やサークルはもちろん、企業組織をまとめるためにも優れたリーダーが欠かせません。どのようなリーダーが優れたリーダーなのかについて、経営学部経営学科の尾形真実哉准教授にお話をうかがいました。

リーダーシップとは何か？

リーダーとは、極めて簡潔に言えば、集団や組織を引っ張っていく人です。そのリーダーに求められる能力がリーダーシップです。では、リーダーシップとは何でしょうか。何となくわかつていて、簡単に説明できないのがリーダーシップです。実際、リーダーシップに関してはさまざまな研究が行われており、その定義も多種多様ですが、リーダーの条件としてよく挙げられるのが①ビジョンや夢をわかりやすく表現できる事、②そのビジョンや夢を成し遂げようとする強い覚悟がある事、③自ら主体的に付いてくるフォロワーがいる事、④実現した成果に社会的意義がある事などです。中でもリーダーシップが生じているかどうかを見極める重要な第一条件となるのが③の主体的に付いてくるフォロワーがいるかどうかです。たとえば、指示に従わなかつたら命の危険があるので、その人に付いて行くとき、それはリーダーシップと言えるでしょうか。そこには主体的に付いてくるフォロワーの存在はありません。

それゆえ、これはリーダーシップとは言えません。強制力や恐怖政治です。企業経営の現場においても、肩書きがあり、自分の評価や出世に影響を及ぼす上司の言う事だから、夢のない指示、嫌な命令でも仕方なく付いて行くときはどうでしょうか。ここにも主体的に付いてくるフォロワーの存在はありません。これは権限による管理です。なんとなく、リーダーシップとは違うなど誰もが感じるのでないでしょうか。その”なんとなく”を明確に見極めるために、「その人には、主体的に付いてくるフォロワーがいるか？」と問い合わせてみてください。その答えが「Yes！」ならば、そこにリーダーシップが生じている可能性が高いでしょう。それは、企業経営や大きなプロジェクトじゃなくても良いのです。小学生や中学生の日常生活においても観察できる現象です。たとえば、誰かが「鬼ごっこやろう！」と声をあげ、創造的な鬼ごっこを提案し、皆がその呼びかけに共感して「面白そうだから、やろう！」と言つて多くの人達が集まり、多くのメンバーが充実感や満足感を得られれば、初めに声をあげた人はリーダー

リードマネジメントと理論

リーダーシップ研究の始まりは、リーダーの容姿や外見、学歴やパーソナリティといった資質に注目する研究群でした。つまり、リーダーたるべき人物は、生まれもつてリーダーとしての資質を備えているという考え方です。それゆえ、リーダーシップの資質理論と言います。分かりやすい例を挙げると外見に関するものです。私たちの頭の中には、誰もが「暗黙のリーダー像」というものがあつて、それを「リーダー・プロトタイプ」と呼びます。みなさんも優れたりーダーを想像してみてください。多くの人のリーダー・プロトタイプは、容姿も優れてい

リーダーの重要性

企業に限らずクラブでもサークル活動でもゼミでも、人が集まる組織や団体が成績を出せるかどうかは、働く個人一人ひとりのパフォーマンスにかかっています。そして、その人たちのモチベーションを大きく左右する存在がリーダーです。つまり、組織のパフォーマンスはリーダー一次第なのであります。今の日本はとても不確実性の高い状況にあると思います。そのような不確実性の高い状況では、多くの人が将来に対しても不安を抱いているはずです。そのような状況だからこそ、多くの人をわくわくさせ、喜んで付いていきたくなるようなビジョンを掲げ、引っ張つていけるリーダーの存在が重要だと思います。

るケーブルが多いと思います。しかししながら、リーダーシップは、外見などの先天的な資質だけで判断されるものではありません。それよりも、どうやって人々を引っ張っていくのか、その「行動」が重要であると言えるでしょう。この行動理論では、多くの行動が抽出されたのですが、それらの行動は、最終的に二つの行動に集約される事になります。それは、「課題軸」と「人間軸」の二つです。課題軸とは、やるべき仕事をきちんと達成できるかどうか、パフォーマンスに関わる行動です。一方、人間軸は、部下に対する配慮や思いやりがしっかりとれているかに関わる行動です。つまり、仕事ができて、部下の面倒見も良い行動がとれる人が行動理論から見た優れたリーダーという事になります。この二軸は、「リーダーシップ行動の不動の二軸」と言われています。

ところが、一人でその両面を意識して行動するのはとても難しいと思います。そこで生まれたのが「リーダーシップ・シェアリング」という考え方です。一人のリーダーにすべてを負わせるのではなく、課題軸と人間軸を複数の人間で担い、リーダーシップをシェアしてフォロワーを引率していくスタイルの事です。今のサッカー日本代表なら、本田選手が課題軸のリーダーであり、長谷部選手が人間軸のリーダーといえるでしょう。

リーダーの育成方法

リーダーの育成方法



「リラックスできる環境が、優れた発想を生む」が、先生の持論。だから研究室も、緑豊かな植物に加えて、スタイリッシュなインテリアで飾られている。居心地がよい職場空間だから「ついつい土日も来てしまう」そうです。

動に關する理論として、「サーバント・リーダーシップ」をあげる事ができます。これは、サーバント、すなわち召使いのよう部下を下から支えるタイプのリーダー・スタイルです。従来のリーダーシップ・ラミッド型のトップダウンのイメージに対して、サーバント・リーダーシップは

リーダーの育成方法

ります。「たかが一割、されど一割」です。リーダーの本質は、人を動機づけて動かす事です。人の動かし方を机上で学ぶ事が難しいのは事実だと思います。それゆえ、実践から学ぶ事が重要です。遊びやアルバイト、サークル活動、ゼミ活動、クラブ活動

Mamiya Ogata

明治大学商学部卒業、神戸大学経営学研究科経営学博士課程修了、経営学博士。創造性や自発性を引き出す組織やチームのあり方、理想的な組織と個人の関係性マネジメント、リーダーの役割研究など、組織の中の人間行動(organizational behavior)に関する研究に取り組んでいます。

私たち民俗研究会が
とことん調べて、お答えしましよう！

味噌つて何だ？

知つてるようで、実は知らない。
「味噌」が教えてくれる

日本文化の奥深さ。

とても身近な
食べ物だけど……？

「お味噌汁が大好きで、毎日飲んでいます。でも、お味噌つて、いつ、どこで生まれたのと疑問に思つたとき、その実体を意外に知らないことに気づいたんです」と、味噌をテーマに取り上げた理由を語るのは川畑わかさん。

白味噌に赤味噌あるいは八丁味噌や西京味噌など名前は聞いたことがあるものの、味噌は全部で何種類あるのか。原料、味、色などによって分類すれば、日本には実際に千数百種もの味噌があるという。関西ではめったに見かけないが、四国や九州では麦から作つた麦味噌、中京地方では大豆と塩だけ作つた豆味噌を食べる。味噌を使つた郷土料理も、各都道府県に一つ以上はある。「少し関心をもつて調べ始めると、次から次へと発見がありました。味噌つて、実は奥深くて、面白い」と研究に引きこまれていつ

と進化していくのだ。だから、湯浅は醤油の産地としても知られるようになった。

お葬式と味噌の意外な関係。

日本人の暮らしと深く結びついている味噌は、葬儀の際にも欠かせない供物となつていった。「図書館で資料を調べていたら、宗教と味噌の関係が語られている文献を見つきました。それまでは食文化の中だけでとらえていた味噌が、宗教とかかわりがある。これは面白いと思ったのです」と矢部さんは、調査報告の中で葬儀との関係を取り上げた経緯を語る。死者への供物として味噌を添えることは全国共通だが、お葬式にかかわつた人たちが、味噌でみそぎをする地域もあるのだ。味噌はことわざにも多く使われている。中でも健康食品として扱われてきた味噌を象徴するのが「味噌は医者殺し」、味噌汁を飲んでいると、人には病気が寄りつかないので、医者の商売が成り立たないことを表している。味噌は、これほどまでに日本の生活文化に深く根づいた食品なのだ。

日本、それとも中国？
味噌はどこで生まれたの？

た様子を、南菜摘さんは振り返る。

味噌の起源には、2つの説がある。日本原住民発明説と、中国生まれの「醤(しょう)」が日本に伝わつて味噌になつたとする説だ。日本説がいわれるには、縄文時代の遺跡からどんぐりで作られた「縄文味噌」が見つかっただから。縄文式土器に、味噌の原型となる食品「醤ひしお」を作つた跡が残されていた。

一方、応神天皇のころに日本にやってきた百濟の王仁博士によつて「醤」が伝えられ、その後改良を加えられたとするのが中國説である。いずれにしても飛鳥時代に定められた大宝律令では、中央官庁の組織の一つとして「醫院ひしおつかさ」が記されており、未醤(みしょう)といふことばも登場する。「未醤」とは、まだ豆の粒が残つてゐる醤のこと。味噌と日本人の付き合いは、遅くともこの時代には確実に存在したのだ。

金山寺味噌。
酱油の元となつた
金山寺味噌。

「味噌をテーマにしました」と顧問の先生に報告したところ、それなら金山寺味噌を作つている和歌山県湯浅町に行つてみたらと教えてもらつたんですね」と、語るのは元部長の矢部寿歩さん。金山寺味噌に目をつけたことによつて、研究は一気に深まつた。

金山寺味噌とは味噌汁などに使う調味料ではなく、いわゆる「なめ味噌」の一種。おかずや酒の肴として、そのまま食べる。夏野菜を冬に食べるための保存食で、なすやしそうが、山椒にシソなどが混ぜ込んである。

その起源は鎌倉時代にまで遡る。そして

ここが重要なのだが、金山寺味噌は醤油の原型でもある。味噌を醸造するときには、仕込まれた野菜から「たまり」と呼ばれる水分がにじみ出でてくる。これが美味しいことに気づいた人たちが、最初から「たまり」を目的として作り、改良を重ねたものが醤油へ

1964年は東京オリンピックの年、世界に向けて扉が開かれた時代背景もあり、研究対象は主に海外文化に。やがて本来の民俗、つまり日本の常民※(じょうみん)文化・基層文化を研究するグループへと活動内容をシフトしてきました。ネット全盛時代にもかかわらず、インターネットを用いない「愚直」な活動に徹しており、文献をあたり、フィールドワークで現地へ足を運び、人々の話を聞き、自分の目で確かめ、「五感」を通じて得られる情報を何よりも大切にしています。またその歴史からは、国立民族学博物館名譽教授を務め、研究会の創設者でもある石森秀三氏など、綺羅星のような先輩を数多く輩出しています。今回は学生たちが取り組んだ「味噌に関する興味深い研究」の成果を紹介します。

※常民／一般に庶民・民衆のこと。日本民俗学において民俗文化・民間伝承の担い手の総称として用いられる概念。



社会に出てからも役立つ現場主義を徹底し、さらなる発展を期待します。

「みんぞくがく」には、民“俗”学と民“族”学の2種類があります。自らの民族の文化を研究するのが民俗学、異民族の文化を研究するのが民族学です。私が立ち上げた当初は「国際民俗研究会」と名づけ、民俗学といいながら関心は世界に向いていました。それほど日本全体が海外に興味を抱く時代だったのです。それが半世紀を経て、日本の常民(じょうみん)文化・基層文化を考える研究会として定着していることをうれしく思います。

しかも、あえてインターネットを使わず、フィールドワークにこだわる。さらに現地の人と触れ合う中で、地域とのかかわりを大切にし、地域振興にも貢献してくれている。後輩諸君の地に足の着いた活動ぶりには、頭が下がります。

私たちの時代と比べれば、確かに部員数は減っているようです。けれども逆に心ある人だけが、すなわち「愚直なこだわり派」が集まっている。本学建学の精神である「個性を尊重して各人の天賦の特性を伸張させる」を、まさに地で行く個性派集団だからこそ、毎年、これほど充実した調査報告を続けられているのだと思います。現場主義、すなわち常に現場を自分の目で見て考える習慣は、これから的人生にも必ず役に立ちます。みなさんの今後の健闘を祈ります。



北海道大学観光学高等研究センター 特別招聘教授
国立民族学博物館名譽教授

いしもり しゅうぞう
石森 秀三氏

1968年甲南大学経済学部経済学科卒業後、ニュージーランドのオークランド大学へ留学。帰國後、京都大学人文科学研究所(梅棹忠夫研究室)研究員、国立民族学博物館助手、助教授、教授、研究部長、センター長などを歴任し、2006年に北海道大学観光学高等研究センター長に就任し、2007年に大学院観光創造専攻を創設。2013年から道立北海道開拓記念館館長、北海道大学観光学高等研究センター特別招聘教授、北洋銀行顧問、国立民族学博物館名譽教授。



世界の友だちがすぐそこに！

「世界に通用する人物を育てたい」という理念のもと開学した甲南大学では、キャンパスの至る所で海外から来た留学生と日本人学生が楽しく交流しています。異なることばや生活習慣で育つてきた学生たちがスムーズに打ち解けることができるのは、国際交流センターに併設された「あじさいーむ」が大きな役割を果たしています。この一室は、自習やおしゃべりを気軽にできる空間であり、学生たちにとっては世界を身近に感じられる特別な場所なのです。

留学生と甲南大生の座談会を通して、甲南大学における国際交流の一コマをご紹介します！

ホームステイ、日本文化の学習など歴史ある独自の受入プログラム。

香 3人はなぜ甲南大学に留学しようと思ったの？

ティエラ 一番の理由はホームステイができること！私は、通訳者になりたくて日本への留学を希望していたの。いろいろ調べてみたら、ホームステイをさせてもらえる大学って中々なかつたのよね。神戸にも興味があつたので、甲南大学にしたわ。

ルイス 僕は「ジャパンスタディーズ」(※1)の授業で日本文化を勉強できることがとても魅力的だと思ったから。実際に受講すると、甲南大生も一緒に授業を受けることもあります、それも楽しいんだ。

レノルド 僕は将来、日本で英語を教えたい

という夢があつて、ハワイ大学の先生に相談したら、歴史や文化の観点から関西の大学をいくつか勧められたんだ。僕自身も関西の食文化などに興味があつたので、その中から甲南大学を選んだよ。

「あじさいーむ」で気軽にキャンパス内留学。

晴名 ジャあ、みんなは甲南大学のどんなところが気に入ってる？

ルイス 学生もスタッフもみんなすごく親切で、アットホーム、などころ！授業では浮世絵を勉強していく、それがとても面白いんだ。

ティエラ キャンパスがきれい。特に図書館が勉強しやすくて気に入ってるの。あと和太鼓サークルの活動がとても楽しい。太鼓を叩いて、それも楽しいんだ。

岡本ツアーや通して世界を身近に！

ティエラ 留学生と甲南大生が仲良くなれる交流プログラムも充実してるよね。

ルイス 来日直後、最初は右も左もわからなくて不安で…そんな中、甲南大生がキャンパスや岡本の街を案内してくれるツアーがあって、とてもありがたかった！しかも一緒に行動するから、甲南大生とたくさん話ができる、友だちになれただ。

香 私たちも、「あじさいーむ」で各国からの留学生たちと交流できることがとても楽しいわ。神戸にある大学の小さな一室なのに、世界とつながっているっていう感じ。

ティエラ 私なんて毎日来るのが好きで、毎日充実した留学生生活を送っているよ。

香 私たちも、「あじさいーむ」で各国からの留学生たちと交流できることがとても楽しいわ。神戸にある大学の小さな一室なのに、世界とつながっているっていう感じ。

ティエラ 私は以前カナダに留学をしていましたが、帰国後も英語力をアップしたかったから、よく来て、留学生と話をしているよ。

香 留学しようか迷っている人は、まず「あじさいーむ」でキャンパス内留学を体験してみてくださいね。

晴名 私は以前カナダに留学をしていましたが、親も一緒に参加する説明会もあって、親身にアドバイスしていただけて、本当に心強かつたな。

香 甲南大生と一緒に、国際交流セントラーやセンターにともどもお世話をなつたの。センター主催の情報交換会で、留学した先輩のお話を聞いたり、留学生を紹介してもらったり。親も一緒に参加する説明会もあって、親身にアドバイスしていただけて、本当に心強かつたな。

香 留学しようか迷っている人は、まず「あじさいーむ」でキャンパス内留学を体験してみてくださいね。

香 留学しようか迷っている人は、まず「あじさいーむ」でキャンパス内留学を体験してみてくださいね。

香 甲南大生と一緒に、国際交流セントラーやセンターにともどもお世話をなつたの。センター主催の情報交換会で、留学した先輩のお話を聞いたり、留学生を紹介してもらったり。親も一緒に参加する説明会もあって、親身にアドバイスしていただけて、本当に心強かつたな。

香 留学しようか迷っている人は、まず「あじさいーむ」でキャンパス内留学を体験してみてくださいね。

香 甲南大生と一緒に、国際交流セントラーやセンターにともどもお世話をなつたの。センター主催の情報交換会で、留学した先輩のお話を聞いたり、留学生を紹介してもらったり。親も一緒に参加する説明会もあって、親身にアドバイスしていただけて、本当に心強かつたな。

香 留学しようか迷っている人は、まず「あじさいーむ」でキャンパス内留学を体験してみてくださいね。

香 留学しようか迷っている人は、まず「あじさいーむ」でキャンパス内留学を体験してみてくださいね。

香 留学しようか迷っている人は、まず「あじさいーむ」でキャンパス内留学を体験してみてくださいね。

香 留学しようか迷っている人は、まず「あじさいーむ」でキャンパス内留学を体験してみてくださいね。

Welcome

一人でも多くの学生に世界と触れ合う機会を

甲南大学国際交流センターの活動の柱は、『留学生の受け入れ』『学生の海外留学支援』『留学生や帰国後の学生を中心とした国際交流イベントの企画・運営』の3つです。話題にあがった「岡本ツアーやその一つ。留学生と甲南大生の親交を深め、岡本の街の魅力を感じもらうことを目的に実施しています。そのほかにも、留学生と来日前からメール交換を通して交流を図る「メル友

プログラム」、言語と文化を教え合う「ランゲージパートナー」、留学生と一緒に授業を受ける「ジャパンスタディーズ」、また、留学生と共にアジアを学び、訪問する「エリアスタディーズ」など、多彩な「国際交流」を提供しています。このようなセンターのさまざまな取り組みが実を結び、毎年70人程度の留学生を受け入れ、150人近い甲南大学生を海外へ送り出しています。

岡本ツアーハイライト
ガイドブック「岡本散歩」

岡本ツアーハイライト
ガイドブック
HPでチェックできます！

甲南大学 国際交流

検索

岡本ツアーハイライト
ガイドブック「岡本散歩」

岡本ツアーハイライト
ガイドブック
HPでチェックできます！

Agriculture

農業は後継者問題に直面している。
「農業を就活の選択肢の一つにしたい。
い。農業インターナーシップに、もっと関
心をもってほしい。そのためにはイメ
ジを変えることも必要と考えて、打ち出
したキヤツチフレーズが『カツコいい』
農業なんです」。



刺激し合えるメンバーで一つのことに取り組む醍醐味。たとえ失敗しても挑戦する意気は十分にあると感じました。

清水 駿さん 創造学部3年次

実家が兼業農家だから、親の苦労を知ることができました。自分を育んでくれた農業を、自分なりに続けていくつもりです。

坂口 慶悟さん 創造学部3年次

【アグリスタ メンバーから一言】
元々興味があったのはベンチャーとしての起業。農業ベンチャーとして、社会貢献にかかわっていきたい。

加藤 佑樹さん 創造学部3年次



農業に
関心をもつたのは
大学の講義から。

農業はビジネスとして
成立する。



「僕たちは今、有機栽培の野菜を作っています。ところが取り組んでみてわかつたのが、有機栽培についてもいろいろな解説があることです。使っている肥料の種類、育て方などが、実はお客様には伝わっていないません。そこで僕たちは、可能な限りフェイス・トゥ・フェイスでお客さまと接して、情報をきちんと伝えるように意識しています」。

ただ作りたいものを作るだけではビジネスにならない。何を買ってもらえるのかを考えてこそ、売れるようになる。これまでの農業に欠けがちだったマーケティング思考を取り入れられたのは、マネジメント創造学部の学生だからこそだ。

「最初はぶっきらぼうなおじいさんだったのが、作業を続けていくうちにどんどん親しくなつて、最後にあいさつに行つたときには、最高の笑顔を見せてくれたんです」。

農業は一人ではできない。人と人が力を合わせて、人が食べる物を作る。一緒に土まみれになって苦労するから、一仕事を終えたときには、とびっきりの笑顔を交わせる。これが農業の本当の姿なら、こんなに素敵な仕事はない。若者こそがやるべき仕事ではないか。ましてや、日本の農業は後継者問題に直面している。

「農業を就活の選択肢の一つにしたい。
い。農業インターナーシップに、もっと関
心をもってほしい。そのためにはイメ
ジを変えることも必要と考えて、打ち出
したキヤツチフレーズが『カツコいい』
農業なんです」。

日本の未来を 変えたい。

「カツコいい」農業で
マネジメント創造学部生の挑戦



日本の農業が、危機的状況に陥っている。農業従事者は就業人口のわずか4.4%まで減り、その平均年齢は65.8歳。1950年には全体の45%に上っていた農業人口は、60年が経つて激減し、高齢化も著しい。前途多難な日本の農業を守るために、今、若者が立ち上がるなければならない。そんな強い使命感をもつてマネジメント創造学部の学生が、農業の活性化をめざす団体「AgriSta(アグリスタ)」を立ち上げた。耕作放棄地に着目し、ブランディングや法人化といった視点で農業をとらえた発想は、にしのみや学生ビジネスアイデアコンテストにおいて最優秀賞を受賞した。さて、「カツコいい」農業は実現できるのだろうか。彼らの挑戦はスタートしたばかりだ。



Agriculture × Student
• AgriSta

メンバー(左から)

金子隆耶さん、緒方健介さん、清水駿さん、
坂口慶悟さん、加藤佑樹さん



甲南大学在学生の出身地は、全国各地に広がっています。関西出身者から集まっています。そうした学生の多くが、下宿で一人暮らしをしています。今回紹介する岡山県出身の今井さんも、そんな下宿生に懸命に没頭しなさい」でした。一つのことを考え抜力が、社会で生きる力につながるという「両親の思いなのでしょう。そこで、興味が大學文学部歴史文化学科を選んだのです。勉強やクラブ活動で充実した日々を過ごす今井さん一人暮らしもしっかりと楽しんでいます。



いまい しょうへい
今井 将平さん
文学部歴史文化学科 2年次

梅も散り、桜のつぼみもだいぶふくらんできましたね。
入学してはや2年、

甲南大学での学生生活は、とても充実しています。

母さん、元気ですか。僕は毎日、朝から晩まで大学で元気に過ごしています。1限目から4限目まできちんと授業に出席し、夕方からはクラブ活動、大学の交響楽団の一員です。食事は生協の食堂を利用して、栄養のバランスに気を配りながら節約にも心がけるようになりました。

2年次になってから授業が一段と面白くなっています。最も関心あるのが中国史。第二外国語で中国語を選択したことをキッカケに学び始めました。また驚いたのが、日中で歴史観、社会観が大きく違うこと。たとえば日本で話題になる「格差社会」についても、中国の視点は日本とまったく異なります。日本では、格差は社会の仕組みが引き起こす現象だから、社会が是正しようと弱者が主張するでしょう。ところが中国では、努力した結果が格差につながっているならしかたがないと、弱者の方が諦めてしまうのです。国が違えば、これほどまでに価値観や考え方が変わることに衝撃を受けました。尖閣問題をはじめ、日中間にはさまざまな問題があるけれど、先入観だけで判断してはいけないと教えられました。

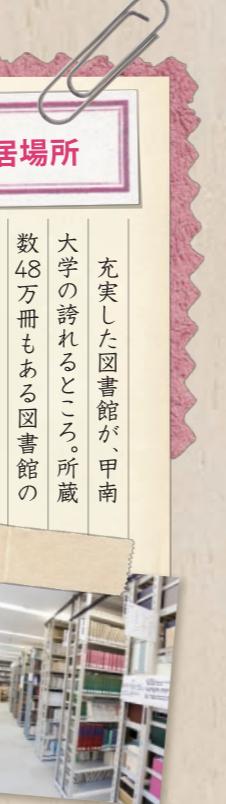
ところで2年次からはゼミに所属します。ゼミでは先生や先輩との距離が、普段の授業にもまして近くなり、疑問を先生にすぐに質問したり、先輩からアドバイスを受けることができます。休日も朝から大学の図書館で課題に取り組むなど、勉強は基本的にキャンパスでしています。また大学の支援プログラムを使って簿記の勉強をし、2級の試験に合格しました。こんなところが近況報告です。

一人暮らしを始めて約2年、掃除・洗濯・炊事にもようやく慣れてきました。覚悟はしていましたけど、家事はやっぱり大変ですね。毎月いただいている仕送りは、家計簿で管理し、やり繕りしています。たまに使い方を失敗して、月末にちょっと困つたりするけれど、それも貴重な体験と楽しめるようになりました。入学前、母さんたちにアドバイスいただいたように、「懸命に没頭できること」が、どうやら見えてきました。残りの学生生活も有意義に過ごしたいと考えています。暦では春ですが、まだまだ寒い日が続きます。くれぐれもお体を大切にしてください。また、次の休みに元気で会えることを楽しみにしています。

敬具



故郷の お母さんへ



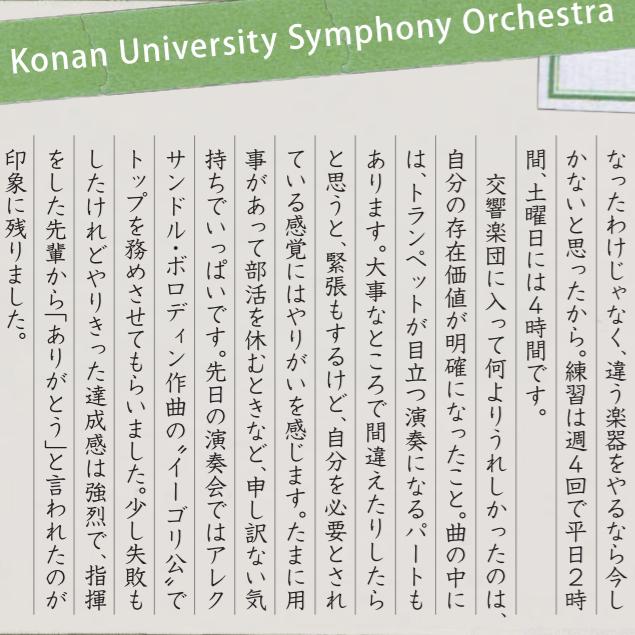
歴史文化学科図書室が居場所

充実した図書館が、甲南大学の誇れるところ。所蔵数48万冊もある図書館のほかにも学部・学科ごとの図書室があります。

授業の空き時間は、たいていここで過ごしています。勉強に必要な中國史の専門的な文献なども、豊富にそろっています。すべて事足ります。先生が調べ物などで来られたときには絶好のチャンス。授業でわからなかつたことを質問したり、ときには学問に関する話の相手もしていただいています。

友達は、すぐにできました。クラスの友達とクラブの友達、両方あわせるとかなりの人数です。もともと見知りしないタイプなので、「ガイドンス」とき、同じ教室においていたのですが、「よな」といった調子で積極的に話かけています。友達に言われて気づいたけれど、僕の話は、ちょっと長いです。そこで、あらかじめ頭の中で会話の内容と流れを簡潔にまとめてから、話すよう心がけています。オーリックス・バファローズのファンだという友達と、京セラドーム大阪に野球観戦に出かけたり、遊びの時間も充実しています。

甲南大学交響楽団



一人暮らしのこと

kobe life

大学から自転車で20分ぐらいのところにあるアパートは、大学生協に紹介していただき決めました。お風呂とトイレはセパレートタイプと、これだけは絶対一とこだわったおかげで、住み心地はとにかく快適。朝は自然に目が覚める方なので、毎日を規則正しく過ごしています。たまたまだけれど大家さんも甲南の卒業生で、紳士的な方です。

母さんがたまにもつててくれる総菜は、一人暮らしの宝物、味わって大切に食べています。実家で新聞を取っていたからと軽い気持ちで頼んでみたら大変なことに。仕送りと新聞代のバランスが合わないし、部屋に新聞がどんどん溜まっています。片付けに苦労しました。たまに「いまテレビで、面白い番組がやってるよ」と電話をかけてくれるのはいいだけれど、岡山と神戸では番組内容が違うから、実は見られないんです。こちらは都会だからアルバイトがたくさんあり、生活費の足しにとたまに短期で働くこともあります。プロ野球に加えてJリーグの試合も見に行ったりして、神戸暮らしを満喫しています。



